

### 第3回 眠狂四郎シリーズ

映画『眠狂四郎』シリーズは、若くしてこの世を去った孤高の天才時代劇スター・市川雷蔵の、キャリア後期の代名詞ともいえる。一連の作品は人気を博し、1961年～69年まで、計12作が製作されている。

本作の魅力はなんといっても、孤独感を背負った狂四郎の虚無的な影と、それに絡んでくる女たちとの間で繰り広げられる退廃的で背徳的なエロティシズムにある。だが、改めて見直してみると、シリーズの作品の大半は実はノーマルな勧善懲悪時代劇の作りになっていることに驚かされる方も少なくないはずだ。

そこで今回は、「これぞ『狂四郎』」と思わず唸ってしまう背徳感に彩られた5作品を紹介していきたい。

#### ■『眠狂四郎 円月斬り』（1964年／第3作／原作・柴田錬三郎／監督・安田公義、脚本・星川清司／出演・市川雷蔵、浜田ゆう子、東京子、丸井太郎、成田純一郎ほか）

60年代前半、新しい現代的な時代劇が次々と誕生する。その先鞭をつけたのが東宝の黒澤明監督で、61年『用心棒』、続く62年『椿三十郎』は迫力のあるアクション描写とスタイリッシュなキャラクター造形が人気を呼び大ヒットした。他社もこれに続き、東映の集団時代劇や、大映の『忍びの者』『座頭市物語』、さらにテレビでも『三匹の侍』（フジテレビ）などが登場。従来の時代劇ヒーローとは全く異なる、アウトローを主人公にした時代劇が人気を博していく。

こうした中で、戦後入社組の若手の映画監督たちが台頭する。東映の山下耕作、工藤栄一、東宝の岡本喜八、フジテレビの五社英雄、そして大映の＜若手三羽鳥＞と呼ばれた三隅研次、田中徳三、池広一夫。彼らは現代的なセンスで、伝統芸能の延長線上にあった時代劇に挑み、新しく時代を塗り変えようとしていた。

そんな期待の若手の一人だった田中徳三が柴田錬三郎の原作に目をつけたのは、「眠狂四郎」という、主人公の異様な名前に惹かれたからだった。以前に東宝が鶴田浩二主演で映画化して失敗していたのは知っていた。が、田中には確信があった。これを市川雷蔵が演じれば冷たさと艶やかさを併せ持った、影を追った新しい時代劇ヒーローが生まれる……。

この企画に雷蔵も乗る。今までの自分のやり方が通じなくなりつつある新しい時代劇の潮流を彼自身も感じていた。ライバルの勝新太郎は「座頭市」を当たり役にして、一躍時代の寵児になりつつある。自分にも「忍びの者」はあったが、それだけでは物足りない。新しい時代を切り開くような、今まで誰も演じてこなかったような役柄を求めている。

だが、結果的に第一作『眠狂四郎 殺法帖』（63年）は彼らの狙い通りにはいかなかった。

映像化権を得る際に柴田練三郎を取り交わした「原作を変えない」という一項が、狂四郎のキャラクターを縛り付けてしまったのだ。原作の狂四郎は、パトロン的な旗本がいたり、子分のような密偵がいたり、常盤津の師匠の離れに通ったりと、賑やかな環境にあって、決して孤独ではない。脚本を任された星川清司は、これに頭を抱える。結局、二週間という短期間で書かされた脚本は狂四郎のイメージを掴みきれないままの中途半端なもので、またそれを受けた現場の田中も掴むことができなかったという。

その後、星川は第二作『眠狂四郎 勝負』（64年）で、三隅研次監督と相談して原作の設定をなし崩し的に外してしまう。事後承諾で柴田がこれを認めたことで、以降は自由に狂四郎を動かすことができるようになり、試行錯誤が重ねられていった。

そして本作から、いよいよシリーズは本領を発揮し始める。

舞台となるのは河原のスラム。権力者によりスラムに追い立てられた人々は、そこでも理不尽な暴力に合い、次々と命を落としていく。狂四郎は何とか彼らを救おうとするが、侍を疑う彼らの心は頑なで、何をしても信じてもらえない。狂四郎は孤独な戦いを強いられることになる。

孤独さと合わせて、本作から描かれるようになった描写がある。このシリーズの代名詞といえば、狂四郎が理不尽なまでの冷淡さで女性に臨み、容赦なくその体を奪うという濡れ場だ。実はそれは本作が最初だった。

商家の娘から將軍の側室へと登りつめる「大それた野心」を狂四郎に得意そうに語る小波（東京子）。それに対して狂四郎は突然「お前を奪う」と言うと、剣を振る女に着物を解いてしまう。美しい裸のシルエットを晒しながら、女は震える……。

本作の登場人物たちは余すことなく悲劇的な結末を迎える。そして狂四郎はただ暗い陰へ去るのみ。前作までの明るさは完全に消えている。

いよいよシリーズとしての本領を発揮し始めた作品といえる。

■『眠狂四郎 女妖剣』（1964年／第4作／原作・柴田練三郎／監督・池広一夫、脚本・星川清司／出演・市川雷蔵、藤村志保、城健三朗、久保菜穂子、根岸明美、春川ますみ、小林勝彦、中谷一郎ほか）

『狂四郎』シリーズは、実は第三作までほとんどヒットしていなかった。

「これで当たらなかつたらシリーズは打ち切りにする。お前が何とかしろ」

本作を担当することになった池広一夫監督は撮影所長からそう宣告を受ける。雷蔵とは公私ともに仲の良かった池広は燃えた。ここで「眠狂四郎」を失えば、雷蔵のスターとしての地位が失墜してしまう恐れがあった。

原作を読み込み、池広は一つの結論に達する。それは、エロティシズムと円月殺法の剣の冴えを強調することである。

エロティシズムで参考にしたのが、当時人気だった映画『007』シリーズだ。主人公の英国スパイ、ジェームズ・ボンドは<ボンドガール>と呼ばれるセクシーな美女たちと毎回恋に落ちる。これに倣い、狂四郎も行く先々で妖艶な美女たちに絡まれ、彼女たちと濡れ場を展開させていく。池広はこれを<狂四郎ガール>と名づけた。そして根岸明美、春川ますみ、久保菜穂子という当時を代表する肉体派女優たちが雷蔵と妖艶な濡れ場を演じている。

そして、これまで「刀が光って眩しい」という程度の描写でしかなかった円月殺法も、特撮を駆使してその刀の動く残像をストロボ的に描写。その剣法の異様な妖しさを映像化してみせた。

星川とは、これらの見せ場を変に理屈をつけて一つの話にまとめずに、辻褄が合わなくともその場面その場面をとにかく面白くしていこうと話を進める。同時に、狂四郎はその暗い出自のために人間不信、女性不信、神への反発を抱く<暗い影を負った男>というキャラクターとして徹底をさせた。

中でも衝撃的なのが、冒頭のシークエンスだ。

肉体派だけでなく、清純な女優が脱がないと意味がない、と。

作品の冒頭、囚われの身となった敬虔なキリシタン宣教師が、女体への誘惑に負けて改宗をしてしまう場面がある。敬虔なバテレンを転ばせるのは処女でなければならない、と池広は考えた。池広の頭に浮かんだのは、大映を代表する清純派女優・藤村志保だった。所長から猛反対された池広は、藤村を直接説得する。

『狂四郎』に客が入らんらしい。所長もこれで駄目ならシリーズを終らせると言っている。このままじゃ、雷ちゃんは勝ちちゃんに抜かれてしまう。僕は雷ちゃんから恩を受けている。こう言っちゃなんだが、志保ちゃんもそうだろう。今の君があるのは雷ちゃんのお陰だ。だから、脱いでくれないか」

当初は難色を示した藤村だったが、数日後にこれを受ける。藤村の出世作『破戒』の主演は雷蔵で、彼女を抜擢したのは雷蔵の鶴の一声だったからだ。大恩ある雷蔵のため、文字通り「一肌脱ごう」と決意したのだ。

藤村が演じるのは、敬虔なキリシタンの少女で、誰よりも宣教師を尊敬している。が、兄を人質にとられ、宣教師を誘惑することを強要されてしまうのだ。そして宣教師は誘惑に負け、彼女を犯す。凄まじい背徳感の濡れ場だった。

そして、同じ牢にいた狂四郎は敬虔な信者たちの末路を見て、神をあざ笑う。藤村の清冽な演技の醸し出す悲劇性により、信仰の無力さ、神への不信、女性への不信といった狂四郎の暗い心象が余すことなく表現され、ドラマを観念的で奥深いものにしていった。

試写を観た三隅研次が「大事にしとる女優を脱がしおって！」と怒ったというが、池広の狙いは功を奏する。作品は大ヒットを遂げ、これを契機に『狂四郎』は人気シリーズとなっていったのだ。そして、この時の池広の築いた世界観が、その後のシリーズに通底することになり、現在に至るまでの『狂四郎』のイメージの基盤となっていく。

■『眠狂四郎無頼控 魔性の肌』(1967年／第9作／原作・柴田錬三郎／監督・池広一夫、脚本・高岩肇／出演・市川雷蔵、鰐淵晴子、成田三樹夫、久保菜穂子、長谷川待子ほか)

大映京都で製作される時代劇には最大の弱点がある。それは、時代劇は脇役の層が薄いことだ。そのため、シリーズを長く続けてくると共演者はどうしてもお馴染みのメンバーになってしまうのだ。

そうした状況に不満のあった雷蔵は自らアンテナを張り、積極的に未知なる共演者を探して回った。第12作『眠狂四郎 悪女狩り』(69年)に登場した吉田日出子はその良い例で、東京に芝居を見に行った際に「面白いのがいる」と、雷蔵自らの指名で京都に呼んでいる。

池広一夫監督も同じ意識を共有しており、雷蔵と話し合いながら、京都に馴染んでいない俳優を積極的に登用していった。本作で雷蔵の相手役に抜擢された成田三樹夫もその一人。後に日本を代表するバイプレーヤーになる成田も、当時は大映東京の専属の、まだデビューからそう年月の経っていない無名の若手俳優だった。が、池広は東京製作の映画で見せる成田の都会的でクールな雰囲気を入っていた。この抜擢に京都の俳優部から池広は吊るし上げを食ったというが、それでも押し通した。

成田もまたこの期待に応える。

本作で成田が演じるのは、全員が小指を黒く塗り、妖しげな儀式とともに悪魔崇拝をする邪教集団の教祖という役柄。一つ間違えればマンガ的になってしまう役どころだ。これを成田は、生来のクールさを残しながら、堂々たる大芝居で演じきっている。そして、最後の決闘シーンに至るまで新人とは思えない貫禄を見せつけ、最後の決闘まで雷蔵と互角に渡り合ってみせた。

もう一人、強烈な印象を残すのが、本作をはじめ池広演出の「狂四郎」のレギュラーだったのが久保菜穂子だ。

『女妖剣』のラストに登場して狂四郎に斬られる「清純な外見をしながら実は巨悪」という二面性のあるシスター役が衝撃的だった。本作でも、狂四郎の馴染の女でありながら裏では狂四郎を罠にかける指名をおびた女という重要な難役を演じている。人間不信、女性不信をテーマとする本シリーズの「影のヒロイン」と呼んで過言でない女優だろう。

■『眠狂四郎 人肌蜘蛛』(1968年／第11作／原作・柴田錬三郎／監督・安田公義、脚本・星川清司／出演・市川雷蔵、緑魔子、三条魔子、川津祐介、渡辺文雄、寺田農ほか)

「狂四郎」シリーズが成功したのには、その魅惑的な数々のセリフの果した役割も大きいだろう。

「お前のような女を見ると、俺のひねくれた無頼の欲情がそそられる。愛撫のさなかに殺すつもりなら、俺が先に殺す。明日になればお前に興味はない。明日は他人だ」

こういった独特の言い回しの観念的なセリフを堂々と書いてのける星川清司の脚本と、それを銜いなく、かといって臭くならず吟じてしまう雷蔵のエロキューション力。これが合わさって初めて、「眠狂四郎」はその独自の生命を得たと言える。

が、その星川は七作を書き終えて力尽きていた。雷蔵は星川が離れた後の脚本に物足りなさを感じていた。

「もう一回やってほしい」

雷蔵直々の申し出に星川は頭を悩ませる。今さら新しいアイデアが浮かぶか心配だった。が、ここで一つの考えが思い浮かぶ。「狂四郎」の世界を思い切って中世ヨーロッパに見立ててはどうか。「ボルジア家の兄妹」を狂四郎と絡ませたら……。残虐な兄・チェーザレと淫蕩な妹・ルクレティア。伝説的に語られてきたこのイタリア貴族の兄妹は、あまりに魅力的だった。星川は一気に脚本を書き上げる。

本作の悪役は將軍の落とし胤で、ある村の森に大きな屋敷を構える土門家武（川津祐介）とその妹・紫姫（緑魔子）の兄妹。兄は村人を連れ去っては弓で射殺することで毎日を過ごすサディスト、妹は持病の頭痛が痛み出すと頭をとかしていた侍女を簪でメッタ刺しにして殺す癩癪持ちである。久々の登板となる星川は、溢れんばかりのアイデアを一気に噴き出し、凄まじい台詞を連発していく。

特に終盤、狂四郎と紫の対峙するシーンの台詞の淫靡な応酬は凄まじい。

紫は狂四郎に自分と同じ「生き血の臭い」を感じ、誘惑してくる。

「下劣さでは黒ミサもそちらにかなうまい」と蔑む狂四郎にも、紫は「悪魔より私が上とは喜ばしい」と動じない。すると紫は「狂四郎、私の肌を見て、そなたの目が少しでも燃えたら、私の勝ち。意のままになろうな」と裸になり、誘ってくる。が、今度は狂四郎が「そんな眺めには慣れている。他に趣向はないのか」と突き放す。逆上した紫は家来たちに狂四郎を斬らせようとするが、一蹴されてしまう。

そして、その上で狂四郎は紫を見下しながら、抱くのだ。

「外では烏が屍肉を喰らい、十字架に架けられた死人の前で死神を抱く。お前と俺と、二人で招いた宴だ。狂い叫ぶがよかろう」

雷蔵もまた、こうした作りこんだ台詞を待ち焦がれていたかのように、ノリノリで狂四郎を演じている。

雷蔵と星川の紡ぎ出す世界はもはや日本映画の枠を飛び越え、パゾリーニやヴィスコンティの映画のようなイタリアの退廃芸術の様相すら呈し、エログロを超えた崇高な美しさを醸しだしている。

■『眠狂四郎 悪女狩り』（1969年／第12作＝最終作／原作・柴田錬三郎／監督・池広一夫、脚本・高岩肇、宮川一郎／出演・市川雷蔵、久保菜穂子、藤村志保、朝丘雪路、江原真二郎、松尾嘉代、吉田日出子、小池朝雄ほか）

シリーズ開始当初から、雷蔵の体は病魔が蝕まれていた。

既に雷蔵は 61 年に直腸から出血をしていたが、この時は医者のお勧めもあり手術はしなかった。この間に癌が進行する。体調の悪化のことはあまり外には漏らさず、大映でも池広と永田雅一社長くらいしか知らなかった。本作の撮影前に雷蔵は直腸癌の手術をし、一度は成功するもののいつ再発してもおかしくない状況にあった。

結果的に最終作となった 69 年正月映画である本作の撮影現場で、雷蔵が衰弱しているのは誰の目にも明らかだった。病人の感じを画面になんとしても出すまいと、本人もスタッフも全力を尽くした。殺陣のシーンでは、引きの画は全て吹き替えを使った。この時、雷蔵はへたり込み、つぶやいたという。「吹き替え使こうて立ち回りせなあかんとは……情けないなあ」。これまで、どんな困難な撮影にあっても、一度として弱音を吐いたり愚痴を言ったことのない雷蔵の、それが初めての悲嘆だった。

雷蔵は勝新太郎とは違い、企画・脚本の段階で注文を出すことはあっても、撮影が始まれば監督の指示に従って演じた。が、今回はそれが違った。狂四郎が大奥へ連れて行かれるシーンが、どうしても納得がいかない。

「これでは感じがしないなあ」「ほかになにかないか」

撮影が始まってからも雷蔵は脚本の変更を要求し、粘りに粘った。

結局、鳥の扮装をした一団が狂四郎をこの世ならざる世界に誘い、そこで能面をつけた女たちが舞い踊りながら狂四郎を誘惑するという幻想的なシーンが挿入されることになった。

が、これは脚本に描かれていないシーンであるため、追加の予算がかかってしまう。鳥の衣装費や舞踊の稽古時間を考えれば、経営不振の大映には許容できるものではない。当然のごとく会社は猛反発する。が、雷蔵は頑として聞き入れなかった。

「雷ちゃんが言ってるんだから何とかしてくれ！」

池広は必死の懇願で会社を説得し、このシーンを半ば強引に入れた。

鳥が象徴するものは「死」以外のなにものでもない。それに固執したということは、雷蔵は間もなく訪れるであろう「自らの死」と共に、狂四郎も死なせようとしていたのかもしれない。

ラストシーン、狂四郎は次のようなセリフを遺している。

「今まで、眠狂四郎が何人いようと構わぬと思っていたが、その了見が変わった。狂四郎はやはり一人でなければならん」

映画の公開から半年後の 7 月 17 日、雷蔵は 37 歳で息を引き取る。そして、その死とともにシリーズは終焉を迎えた。

## 【DVD 情報】

『眠狂四郎 円月斬り』（角川書店）

『眠狂四郎 女妖剣』(角川書店)

『眠狂四郎無頼控 魔性の肌』(角川書店)

『眠狂四郎 人肌蜘蛛』(角川書店)

『眠狂四郎 悪女狩り』(角川書店)